

七月定例能番組

平成三十年七月一日(日) 午後一時始
於 石川県立能楽堂

(能)

加茂物狂

シテ 松田 若子

ワキ 北島 公之

ワキツレ 平木 豊男

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 住駒 俊介

笛 江野 泉

後見 渡邊荀之助
福岡 聡子

地謡

谷 清士 藪 克徳
岩井 嘉樹 渡邊 茂人
大澤 永靖 高橋 憲正
田屋 邦夫 佐野 弘宜

休憩 二十分

(狂言)

寝音曲

太郎冠者 炭 哲男

主人 能村 祐丞

後見 荒井 亮吉

(仕舞)

氷室

藪 俊彦

地謡

佐野 玄宜
高橋 右任
島村 明宏
川島 英治

(能)

ツレ 木谷 哲也

シテ 広島 克栄

大

会

ワキ 苗加登久治

大鼓 亀井
小鼓 河原

洋佑 清

太鼓 大橋 紀美
笛 室石 和夫

間 清水 宗治

後見 高橋 右任
藪 克徳

地謡

山本 貢伸 佐野 玄宜
酒井 章 佐野 由於
長野 裕 島村 明宏
山崎 健 松本 博

終了 午後四時頃

能 加茂物狂 (かもものぐるい)

東国一見の旅に出た都方の男(ワキ)が三年ぶりに故郷の都に帰り、加茂の社に参詣します。折から今日は四月の中の酉の日、加茂の葵祭とあって、着飾った人波が続きます。その中に恋慕のために物狂いとなった女(シテ)が混じっています。男が女に心を静めて祈れと声を掛けたことから会話が始まり、昔藤原実方が美しい舞い姿を映したと聞いて、女は橋本の宮の御手洗川に自分の影を映して見ると、泣きたくなるほど衰え果てていました。その様子をつくづく眺めた男は女が自分の妻であることに気づきます。しかし人目をはばかって神に舞を手向けるよう女に勧めます。勧めに従い女は舞いかつ祈ります。その述懐によれば、女は夫の帰りを信じながらも待ちきれず、夫を探して東海道を宇津の山あたりまで下り疲弊して花の都へ戻った由です。岩本社に祀られた在原業平の詠歌を思っ舞う女もそれを見る男も、互いに相手と分かり合っ人目を気にしつつ自宅へ帰ります。

狂言 寝音曲 (ねおんぎょく)

したたかに酒に酔った太郎冠者、妻の膝枕で気持ちよく謡をうたい、その声を謡好きの主人に聞かれて、翌日さっそく所望されます。所望癖は今後の迷惑と、太郎冠者が条件を付けますが、言われるままに主人は大酒を飲ませ、妻に代わって膝枕を提供します。謡(玉の段)はみごと、しかし起きてうたわれぬこともあるまいと、起こし、立たせ、また寝させるうちに、声の出る姿勢と声の出し方を取り違えて、太郎冠者の横着が露見します。

能 大 会 (だいえ)

大会とは大規模な法会、そこに集う大衆を意味する言葉です。本曲では釈迦が靈鷲山で法華経を説いた文字通りの大会を、靈鷲山を移したといわれる比叡山を舞台に天狗の魔術で現出させます。まず、この霊場を讚歎する僧(ワキ)の庵室を、近くに住む山伏を名乗って訪ねる者(前シテ)がありました。都東北院のあたりで命を助けられた報恩に僧の望みをかなえましょうというので、僧は釈迦の大会を拝みたいと答えました。ただし拜んで尊いと思われては不都合であると、山伏からは妙な注文がきます。僧は約諾して杉木立に行き、目をふさいで待つことにします(中入)。そこへ経巻を持った釈迦(後シテ)が現れますが、面相といい羽団扇といい天狗の正体を隠し切れていません。僧は展開する大会に思わず信心を起こし、約束を違えて合掌してしまいます。その時全山が震動して天からは帝釈天(ツレ)が下りたまひ、釈迦に扮した天狗の魔術を解いて懲らしめます。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十年九月二日(日) 午後一時始

(能) 小 督

(狂言) 蚊相撲

(能) 昭 君